

[第32回学術集会 シンポジウム1]

ビジネスケアラーを支えるには —ビジネスケアラー支援事業を行う企業の視点から—

株式会社チェンジウェーブグループ

木場 猛

介護に直面した働き手の多くは、「仕事との両立ができるかどうか」以前に、何から手をつけてよいかわからないと感じています。これは、私たちが企業に提供している仕事と介護の両立相談窓口に寄せられる、非常に多い相談の出発点です。

支援を必要としているのは、すでに介護が始まっている方だけではありません。高齢の親の体調が気になりながらもまだ手が出せない状態で、将来の不安を言葉にできず抱えている。そういった予備軍の方々も数多くいます。実際、介護中の方と比べても、介護が始まる前の人のほうが強い不安を感じている傾向があります。介護予備軍の9割以上が何らかの不安を抱えており、その中でも約24%は「非常に強い不安」を感じていると回答しています¹。介護の実態がまだ見えていないこと自体が、不安感の高さにつながっていると考えられます。

また、介護中の方のうち約35%は、社内の誰にも相談していないというデータがあります²。制度が整っていても、実際に使うには大きな心理的ハードルがあることがわかります。

こうした背景から、相談の場面では、制度や情報の提供に加えて、本人の希望や心理的ハードルを言語化することを重視しています。支援が機能するかどうかは、制度そのものよりも、どのように接点を設計するかにかかっていると感じています。

実際の相談では、「制度を使うことで周囲に迷惑をかけるのでは」「評価が下がるのでは」といった不安が多く聞かれます。私たちは、こうした現状に配慮しながら、それぞれの企業が適切なタイミングと方法で支援を届けられるよう、制度設計や接点づ

くりを支援しています。

仕事と介護の両立支援において本当に重要なのは、制度やサービスがあるかどうかだけではなく、それが本人に届くか、そして届いた時に動ける状態になっているかどうかです。

本発表では、相談業務に加えて、企業を通じてビジネスケアラー当事者と予備軍の支援を行ってきた立場から、実践で得た気づきをもとに、どのような支援が働き手の行動変容につながるのかについての考察を共有します。

【出典】

- ¹ チェンジウェーブグループ：『ビジネスケアラー白書（2025年版）』「介護に関する不安」
- ² 同上「介護中の相談先に関するデータ：社内で誰にも相談していない人34.8%」

略歴

介護福祉士、介護支援専門員
 東京大学文学部歴史文化学課卒業、武蔵野大学別科介護福祉士養成課程非常勤講師
 2001年から現在まで20年以上、現場の介護職として2,000世帯以上の高齢の方とご家族を支援
 2018年株式会社リクシスに参画し、現在も高齢者支援や介護の現場に携わりながら、仕事と介護の両立支援クラウド「LCAT」コンテンツ作成や「仕事と介護の両立個別相談窓口」相談業務（年間約400名対応）を担当
 2023年9月「仕事は辞めない！働く×介護 両立の教科書」（日経クロスウーマン）